

明治150年・開港160年  
港から振り返る世界と日本の経済

はじめに

演題の港の門口から世界経済を見るという発想は、実は故宮澤喜一総理のお言葉からヒントを得たものです。昭和63年の秋に、全国税関長会議というのが開かれ、その席上で全国9つの税関長が、当時の宮澤大蔵大臣の御前でそれぞれ管内情勢の報告をしました。宮澤大臣は非常に興味を示され、「自分は経済の専門家だと思っているが、それは統計の数字で見た経済である。それに対して諸君は門口に立って日々の荷動きを見ているわけだから、より生きた経済を見ているのだな」とおっしゃいました。今日は多少なりともそういうお話をしたしたいと思います。

横浜税関はミナト横浜と双子の兄弟

先ず日本最初の横浜税関とミナト横浜の生立ちと歩みを振り返ります。

ご存じの通り、嘉永6年黒船来航。ペリーが浦賀にやってきて開港を迫り、翌安政元年、再び来航したペリーとの間で日米和親条約が結ばれました。この間ペリーは砲艦外交といわれるように、大砲を背にかなり

高圧的な態度だったようですが、日本人の能力については高く評価し、それなりの敬意を払っていたことが、著書『日本遠征紀』からもうかがわれます。現在横須賀商工会議所の正面玄関に記念のレリーフが掲げられています、その一部をご紹介しますと、

「実際的および機械的技術において、日本人は非常な巧緻を示している。・・・日本人がひとたび文明世界の過去・現在の技能を有したならば、機械工業の成功を目指す強力なライバルとなるであろう」

「読み書きが普及しており、見聞を得ることに熱心である。・・・彼らは自国についてばかりか、他国の地理や物質的進歩、当代の歴史についても何がしかの知識を持っており、我々も多くの質問を受けた」「長崎のオランダ人から得た彼らの知識は、実物を見たこともない鉄道や電信、銅版写真、汽船などに及び、それを当然のように語った。またヨーロッパの戦争やナポレオン、アメリカのワシントンについても的確に語った」、とあります。

安政3年（1856年）タウンゼント・ハリスが下田にやってきて、さらに2年後の安政5年4月幕府は井伊直弼が大老に就任、6月、朝廷の勅許なしに日米修好通商条約（安政の不平等条約）を結び、函館、新潟、神奈川、兵庫、長崎の5港の開港を約束しました。ここから幕末の血なまぐさい騒動が始まるのですが、それはさておき、翌安政6年（18

59年) 横浜開港、神奈川運上所が設置され、ミナト横浜、横浜税関の歴史が始まります、そして早くもその年の年末生糸の輸出が始まっています。

元々港があり、町があった全国各地の港町と違って、横浜は税関の誕生と同時に港が作られ、それから町が開けていった、都市と税関がいわば双子の兄弟だということに独自の特色があります。

外国人の目から見たその頃の日本人像を知る、もう一つの今度は精神面のエピソードです。ドイツの考古学者ハインリッヒ・シュリーマン（トロイ遺跡の発掘者で、岩波少年文庫 A. T. ホワイト著『埋もれた世界』の主人公のあのシュリーマンです）が、1865年（慶応元年）に中国から江戸を目指して横浜へ着いて運上所の門をくぐった時のことが、彼の『清国・日本旅行記』に書かれています。

「二人の官吏がにこやかに近付いてきて、オハイヨと言いながら、地面に届くほど頭を下げた。次に、中を吟味するから荷物を開けるようにと指示した。荷物を解くとなると大仕事だ。できれば免除してもらいたいものだ、官吏二人にそれぞれ1分（2.5フラン）ずつ出した。ところがなんと彼らは、自分の胸を叩いて「日本男児」と言い、これを拒んだ」

世界を旅し、各国の税関を通ってきたシュリーマンから見ると大変な驚きであり、日本人、日本の役人

の清廉潔白さを紹介するエピソードとなっています。  
ご本人清廉潔白とは縁遠い他ならぬシュリーマンが  
書いているのが泣かせるところです。今では当たり前  
のことではありますが、その時代からこうだったとい  
うことは、その後今日に至るまで157年の横浜税関  
の魂であり、誇りであります。

その後の横浜の歴史を詳しく辿っている時間はあ  
りませんので、一言だけ申し上げますと、税関は生ま  
れだけでなく、その後も横浜が歴史上の3重苦、震災、  
戦災、接收で苦しんだ時には共に苦しみ、みなとみら  
いで再び発展を遂げた時には共に発展してきており、  
その意味でも双子の兄弟だと申し上げているのです。

## 税関の生立ちと歩み

- 1853(嘉永6)年6月ペリー浦賀来航国書交換、翌年再来航3月日米和親条約
- 1858(安政5)年6月タウンゼント・ハリスと日米修好通商条約調印
  - 函館、新潟、神奈川、兵庫、長崎の5港の開港約束
- 1859(安政6)年6月2日横浜開港、神奈川運上所設置、生糸輸出開始
- 1865(慶応元)年考古学者ハインリッヒ・シュリーマン来日、
  - 神奈川運上所で日本官吏の清廉潔白さに驚く(『清国・日本旅行記』)
- 1872(明治5)年11月28日運上所を税関と名称変更
- 1911(明治44)年不平等条約第2次改正、関税自主権回復
- 1923(大正12)年9月関東大震災、市域・港湾と共に税関も壊滅
- 1945(昭和20)年5月横浜大空襲で被災、9月庁舎米軍接收
- 1953(昭和28)年、8月東京税関を分離、11月庁舎接收解除
- 1983(昭和58)年、みなとみらい21着工
- 1989(平成元)年、開港130周年、市制100年記念横浜博覧会開催
- 2009(平成21)年横浜開港150周年
- 2019(平成31)年横浜開港160周年
- 2020(平成32)年東京オリンピック・パラリンピック

## 横浜開港当初から戦前の貿易

それでは開港以来、戦前の日本経済を横浜港の門口からみて見ましょう。開港の翌年、1860年（萬延元年）の日本の輸出品目は生糸、茶、油、種子、干魚、昆布と、とても牧歌的なものです。（明治初年の蚕卵紙とは蚕の卵を紙に張り付けて輸出したものです。日本の幕末から明治初年、欧州では伝染病により蚕が全滅状態、日本から卵を輸出しました。蘇木は、漢方薬の原料、マメ科の植物の心柱です）日露戦争に勝利して勢いが出てきた1907年（明治40年）頃、ようやく絹のハンカチやテーブル・クロスといった品目が出てきます。戦前の日本経済のピークと言われている昭和10年頃になって玩具、鉄管、機械部品、自転車といった工業製品が出てきます。

貿易は世につれ（1）

戦前横浜港の主要輸出入品目の推移

年	輸出	輸入
萬延元年(1860)	生糸 茶 油 銅類 種子 干魚 薬品 昆布 絹織物	綿織物 毛織物 薬品 亜鉛 蘇木
明治5年(1872)	生糸 茶 蚕卵紙 銅類 真綿 熨斗糸 屑糸 水産物 繭 金属製品	綿糸 毛織物 綿織物 砂糖 綿毛交織物 皮革類 鉄類 酒類 薬品 染料・塗料
明治40年(1907)	生糸 羽二重 銅類 茶 屑糸 絹手巾 テーブルクロス 熨斗糸 油・蠟 紙・油製品	機械類 鉄類 繰綿 米 羊毛 毛織物 薬品 砂糖 綿織物 紙・紙製品
昭和10年(1935)	生糸 小麦粉 縮緬 蟹缶 玩具 鉄管等 着物 機械部品 自転車等車両 羽二重	繰綿 原油・重油 羊毛 小麦 雑機械・部品等 鉱油 パルプ 大豆

## 幕末の金流出

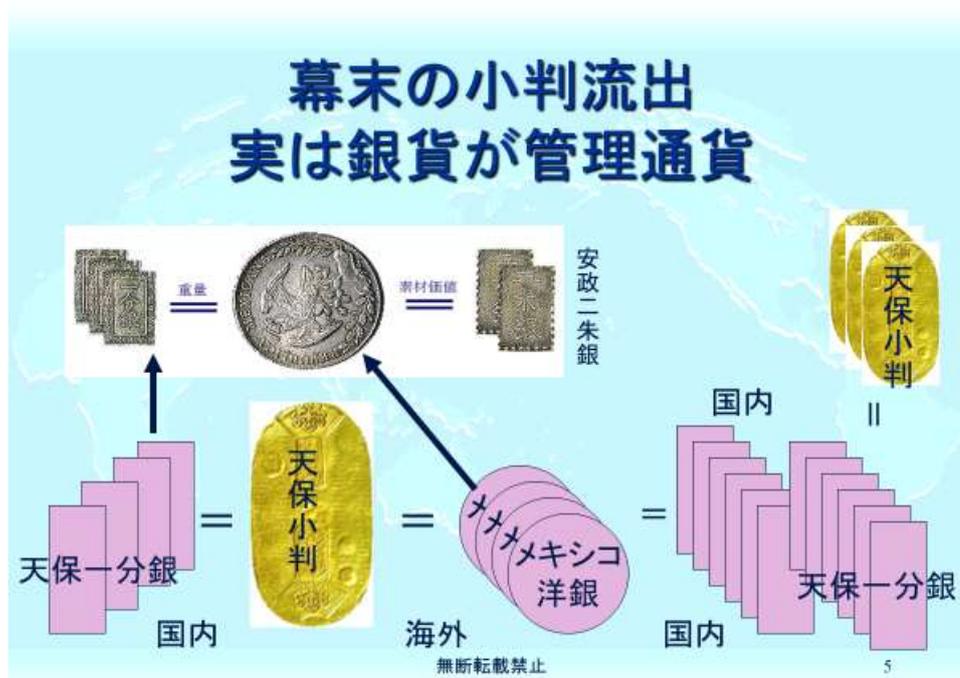
少し難しいかもしれませんが、幕末の最大の貿易問題ともいえるべき、金の流出についてお話ししたいと思います。日本人としては悔しく、腹の立つ話です。江戸時代の貨幣の単位は、1両が4分、1分が4朱という4進法の単位で、金貨と銀貨があり、金銀の複本位制でした。当時、1両は天保小判、銀貨は、額面1分の貨幣として天保1分銀が流通していました。

金貨天保小判は海外では4ドルと評価されていました。ドルの金貨は流通はしてはいないものの存在はしていたので、その金貨との金含有量換算で天保小判1両は4ドルという評価が海外でされていたわけです。そうすれば、お金の値打ちという点では、4分の1両である1分は1ドルの筈でした。流通する貨幣としてはメキシコ洋銀というのが1ドル銀貨として通用していましたから、メキシコ洋銀は本来1分、天保1分銀と等価だったはずなのです。しかし、銀の含有量からすると、メキシコ洋銀には27グラムの銀が入っているのに対して、天保1分銀は9グラムしか入っていなかったもので話がややこしくなります。

日米修好通商条約で、同種同量の原則、金も銀も1グラムは1グラムで交換できることになってしまったために、メキシコ洋銀1枚を日本に持ち込むと、天保1分銀3枚と交換できることになってしまいました。海外で小判1両で貰ったメキシコ洋銀4枚は日本

国内に持ち込むと天保1部銀が12枚貰えることになり、これを金貨の小判に交換すると3両となるわけです（次の図の通り）。

つまり、天保小判を海外に持ち出して回すと、濡れ手に粟で3倍になる。そういうわけで、小判が流出し、外国人がノーリスクの大儲けをしたわけです。実際には輸送コスト等によって3倍にはなりませんでしたが、それでも倍くらいにはなったということです。



この話を歴史の教科書では、日本では金1グラムが銀5グラムの値打ちだったのに対し、海外では金1グラムが銀15グラムの値打ちで、金銀の値打ちの格差により起こった、と簡単に片付けていますが。実態は、『大君の通貨』（佐藤雅美著）という名著に詳細に書か

れている通りもっと複雑なのです。

実は、その100年くらい前までは、銀貨には天保1分銀の約3倍の銀が使われていましたが、幕府が財政事情、財源調達のために銀の含有量をどんどん減らしていったのです。つまり、銀の悪改鑄を繰り返していった結果、天保1分銀というのは幕府の信用によって、素材価値の3倍で通用する管理通貨になっていたわけです。何より証拠には、長崎などで外国貿易に使われていた銀貨は、天保1分銀ではなく、豆板銀という重さで量って通用する秤量貨幣で、その際の金銀比価は海外と同様の約15対1だったのです。だから天保1分銀は銀の目方で評価してはいけなかったのです。

金の大量流出に驚いた幕府は、安政2朱銀というのを鑄造しました。2朱というのは1分の半分です。銀の含有量は天保1分銀の1.5倍にして、1分の銀の重さがメキシコ洋銀と同じになるようにしました。そして以後の天保1分銀の使用を禁じようとしたのですが、すでに甘い汁をたらふく吸っていたハリスなど外国勢の猛反発にあって、断念しました。

結局、金貨のほうの金の含有量を3分の1に落とした萬延小判を鑄造して解決したのですが、それまでの約10カ月の間に、全国の金貨流通量の2%にあたる50万両、すなわち千両箱で500箱分が海外に流出したのです。

金貨の値打ちを3分の1に落としたことによって、

国内では猛烈なインフレが起きました。ある歴史学者によれば、そのインフレが幕府の命取りになったという説すらあるくらいです。

私の個人的感想ですが、この話は今日にも通用する教訓を含んでいるように思います。すなわち、鎖国時代には通用していたことでも、開放経済になると破綻するということです。今日でもグローバル化が進展すると、従来行っていた国内でのさまざまな規制ができなくなってしまうということで、現代日本でも、最近まで山のようにあった話です。

それからもう1つ、紙幣であれば管理通貨であることは誰でも分かったはずで、当時でも藩札というものがありませんでした。しかし、本位金属である銀のお金が実は管理通貨で、本来の価値以上に通用しているということを、まず自分が理解するのは非常に難しい。さらに自分が理解した上で外国人に分かるように理路整然と説明するということは、当時の幕府の役人の能力を超えていました。

今日でも言えますが、国際経済交渉で日本独特の制度を外人に説得、説明することは、本当に大変なことです、私自身も散々苦労しました。飛び抜けて優秀な説得力をもった、語学もできる稀有な人材がいなければできないのです。

ただ、ハリスなども、こんなにうまい話があるわけがないので、変だとは気が付いていたはずですが、それでも居丈高に横車を押し通しました。これも、日本は

外圧で威嚇すればいいという始まりかと思えば、悔しく苦い教訓です。

前掲『大君の通貨』は、「幕末円ドル戦争」というサブタイトルが付けられていました。発行されたのがちょうど昭和59年で、まさに日米円ドル委員会をやって、日本がアメリカから攻め立てられていた時期なのです。

脱線しますが、伊豆の下田に行くとハリスは日米友好の立役者としてあちこちに銅像や顕彰碑がありますし、平成28年正月千葉県よしの佐倉城址公園に行ったら、城主の老中堀田正睦像と並んでハリス像がありました。しかし私はこの佐藤雅美さんの本を読んでから、ハリスを好きにはなれません。それに引き換え、ペリーは立派な軍人だと思います。

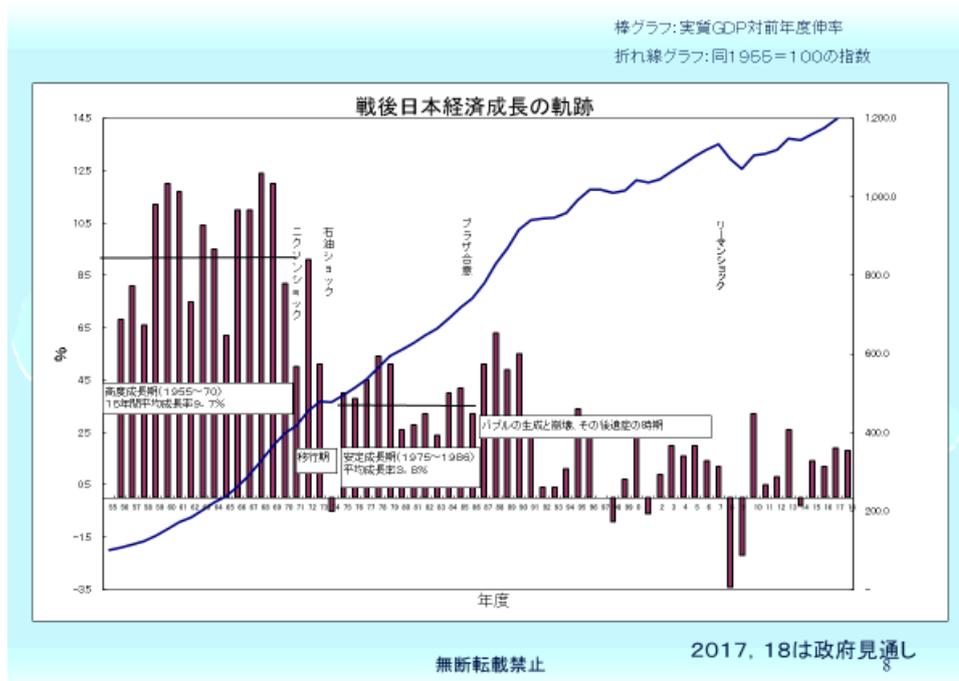
## 戦後日本の経済成長

次に、戦後日本の経済成長を振り返ってみると（次のグラフ）、大まかに3つの時期があります。

第1フェーズは1955年（昭和30年）から70年（昭和45年）年までの15年間にわたり平均成長率約実質10%という、人類史上空前といわれた、奇跡的高度成長を続けた時期です。この時期も、一本調子ではなく、成長率に変動はありましたが、平均で非常に高いレベルで推移しています。

1965年、東京オリンピックの翌年に戦後空前と

いわれた不況を経験して、国債発行に踏み切り、それが成功して、またいざなぎ景気へとつながっていきました。



第2フェーズは、ニクソンショックや石油ショックといった移行期を経て、1975年から86年までの12年間、平均成長率4%弱の安定成長期です。

第3フェーズは、プラザ合意を経てバブルが発生、そしてバブルが崩壊して、一進一退を繰り返しました。さらに、サブプライム問題によって世界同時不況となっています。つまり、バブルの生成と崩壊、その後遺症、それが終わったと思ったら、また次の苦難に見舞われた、失われた20年ないし25年という時代です。

この成長の足取りを、名目1人当たりのGDPの推移をアメリカと比較してみると次の表の通りです。

**名目一人当たりGDPの推移(\$)**

年	日本	米国	日本/米国 (%)	備考
1955	259	2,436	10.6	
1963	721	3,187	22.6	1964:IMF8条国, OECD加盟 東京オリンピック
1971	2,177	5,284	41.2	ニクソンショック 1\$ = ¥360 → ¥308
1973	3,809	6,369	59.8	変動相場制移行 イタリアと英国を抜く
				1983, 4:フランスと西ドイツを抜く
1986	16,344	17,736	92.2	カナダを抜く
1987	19,731	18,695	105.5	米国を抜いてG7トップに

無断転載禁止

9

1955年は、日本は259ドルで、アメリカの2436ドルの1割程度でした。この水準は当時のアフリカのガーナや、マレーシアと同水準です。

東京オリンピックの1964年は、経済的にはIMF8条国に移行したり、OECDに加盟した年です。いちおう先進国の仲間入りをしましたが、それでもその前年63年はやっとアメリカの2割です。ニクソンショックの71年には、これが約4割になります。この後、円高によって、ますますこの差が縮小して、その2年後、つまり変動相場制に移行した73年(昭和48年)には6割に達し、ここでイタリアとイギリスを抜きます。

その後、フランスと西ドイツを抜き、プラザ合意によって円高となり、1986年にはカナダを抜いてアメリカの9割となり、そしてついに87年、アメリカを抜いてG7のトップに踊り出ます。実際は日本の物価が高いので、購買力平価で見ればアメリカの水準には届いていません。残念ながら、その後バブルが崩壊、失われた20年で、またランキングが落ちていきますが、それはまた後で。

これを貿易の門口からみる（次の表）と、高度成長期前には、鉄鋼、金属製品といった輸出品目が出てくる一方、生糸、魚介類のような、明治時代を引きずっているようなものもありました。

**貿易は世につれ(2)**  
**(戦後の輸出入ベストテン品目の変遷)**  
同時期に輸出入両側に登場する品目とその意味様々

高度成長期前 (昭和25~34年)	綿織物 鉄鋼 金属製品 船舶 魚介類 人絹・スフ織物 衣類 中途退場: 非鉄金属 生糸 絹織物	棉花 石油 小麦 砂糖 羊毛 大豆 生ゴム 鉄鉱石・屑鉄 米
高度成長期~ 昭和50年代	鉄鋼 自動車 船舶 金属製品 絹織物 合成繊維織物 ラジオ 科学光学機器 前期: 魚介類 衣類 後期: 人造プラスチック テレビ テープレコーダ	原粗油 棉花 鉄鉱石・屑鉄 木材 石炭 石油製品 非鉄金属鉱 (前期) 羊毛 小麦 生ゴム (後期) 繊維製品 魚介類 非鉄金属
昭和50年代末 ~平成初	自動車 鉄鋼 船舶 科学光学機器 自動車部品・原動機 テープレコーダ 映像機器 音響機器 通信機 事務用機器 半導体等電子部品	原粗油 繊維製品 魚介類 木材 非鉄金属 石炭 石油製品 有機化合物 (前期) 鉄鉱石 (終わり頃) 鉄鋼
平成年代の変化	(テープレコーダ、音響機器消え、プラスチック、有機化合物が入り、順位に変動あるが、質的变化無し) 無断転載禁止	(半導体等電子部品 事務用機器) が入り、鉄鋼 魚介類 石炭 石油製品は出入り) (一時) 自動車 肉類 10

高度成長期から昭和50年代に入って、このような品目は次第に姿を消し、前期には合成繊維や衣類がありますが、これらは次第に輸入品目へと移っていきました。そして、鉄鋼や自動車に続いて、ラジオ、テレビ、テープレコーダといった、次第に技術水準の高い高付加価値品が入るようになります。

昭和50年代末から平成の初めにかけては、さらにコンピュータ、半導体が入ってきますが、このへんまでは日本の産業構造の変化の反映といえることができます。

面白いのはその後です。それまでは基本的には輸出品目は輸出品目、輸入品目は輸入品目であったのですが、昭和50年代の終わりから平成以降にかけて、同じ時代に同一品目で輸出入両方のベストテンに姿を現す品目が出てきました。自動車、鉄鋼、事務用機器と半導体等電子製品です。

事情はそれぞれ異なり、鉄鋼の場合には、ハイテクの鋼板や自動車用の高級薄板などの高付加価値品が輸出品目で、矢板とか土木工事に使うような安い鋼材、低価格品が輸入品目といった国際水平分業でした。

自動車はもちろん輸出品目のトップですが、輸入自動車はバブル期はヨーロッパの高級車です。バブルがはじけて、自動車は輸入のベストテンから姿を消しますが、その後、アメリカの小型車と、日本の海外現地生産の逆輸入品で自動車が輸入のベストテンに姿を

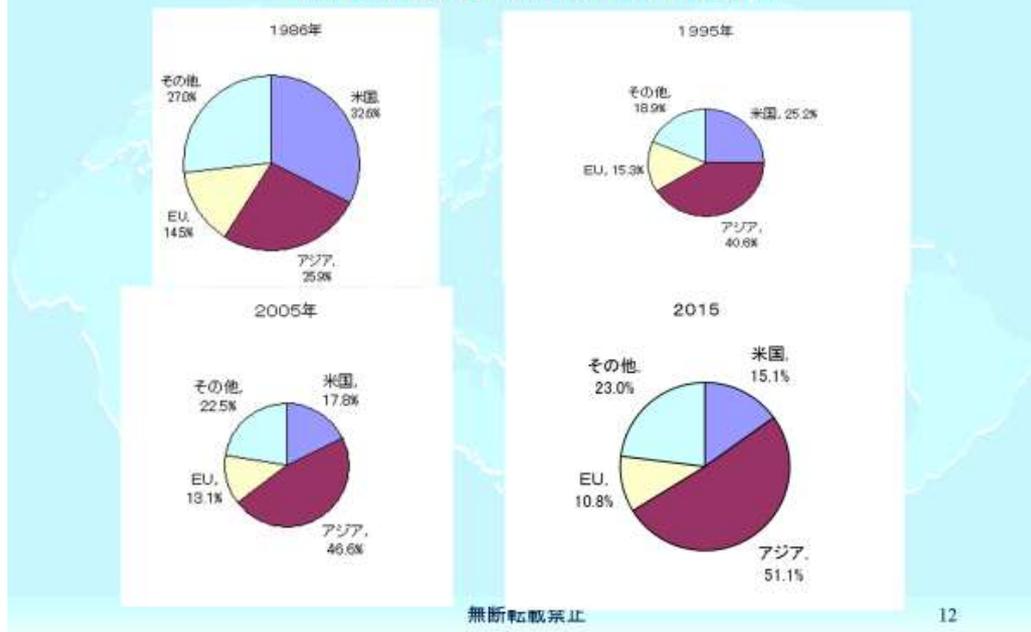


IMF（国際通貨基金）が2000年5月に発表したところによると、1900年から2000年までの100年間に、世界の人口は16億人から63億人へと、爆発的に増えました。幸いなことに、この100年間で年間の生産は、物価変動を除いた実質ベースで19倍に増え、結果として、人口1人当たりの実質生産は4.7倍になりました（前半50年が1.7倍、後半50年が2.7倍です）。

でも、この4.7倍の成長の恩恵は世界一律ではありません。国や時期によって大きな格差があります。これによると、成長率のトップが台湾の22.2倍、2番目が日本の18.2倍、3番目が韓国で16.8倍、中国は9.6倍となっていますが、実は中国は前半はマイナスで、後半で10倍以上、トータルで9.6倍となりました。このように東アジア諸国が上位を占めているわけですが、それは20世紀後半のことで、前半は大きく出遅れています。日本でさえ、前半50年は世界平均と同じ1.7倍で、後半の50年で急成長したわけです。ただこの話には21世紀に入ってから続きます。それは後ほど。

さらにこの頃世界はどう変わったのかを、日本の貿易の門口から見てみます。日本の貿易額の地域別の構成の推移を見たのが次のグラフです。

### 貿易は世につれ(3) 我国貿易額の地域別構成の変化



1986年には輸出入合計でアメリカが3分の1、アジアが4分の1、EUが15%くらいでした。

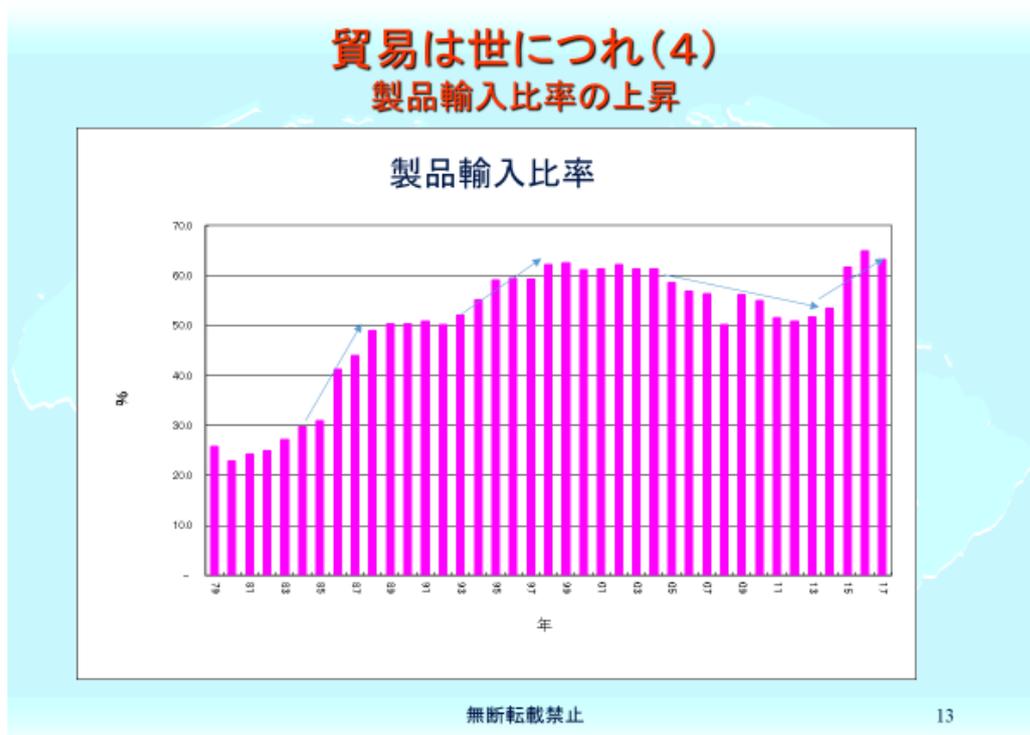
それが1995年には、アメリカが4分の1、アジアが4割になります。2005年になるとアメリカは17.8%に落ちて、アジアが5割に近づきます。EUも落ちていきます。2015年にはアジアが半分を超え、アメリカは15%、EU10%となっています。

つまり米欧に代わって、アジアのプレゼンスが非常に高くなってきたことが、日本の貿易の門口からもよく分かるということです。

また、製品輸入比率の推移をみると、わが国の輸入全体の中で、製品といわれるものの占める割合

は、オイルショックのときには少し減るのですが、高度成長期以来25%から30%の間で安定的に推移していました。

日本は資源がない国なので、原料や燃料を輸入して加工し、モノを作って輸出する。製品というものは輸出するもので、輸入するものではない。私達の若い頃はこう教えられてきましたが、1980年代後半から変化が現れます。



製品輸入比率は、プラザ合意の後から、階段を駆け上るように5割まで上がります。5割で安定したかと思えば、バブルがはじけた後、1993年からアジア

が急速にブースターがかかり、6割に上昇します。一時下がっているのは原油高のせいであり、98年頃からは6割という水準で推移し、直近ではさらに上昇しています。もはや日本は製品は輸入するものであるという経済なのです。これも、円高による海外生産の増加、アジア諸国の急速な工業化が、この貿易の門口から見受ける世界だということです。

## 密輸の動向

闇の貿易ともいうべき密輸についてですが、これも世相を反映しています。

**密輸も世につれ**

- 戦後の混乱期 終戦直後の物不足から、砂糖、薬品、食料などの生活必需品が中心。密輸の形態も大型、集团的、暴力的
- 昭和30年代まで 時計(南京虫) 貴金属が主役  
 嚴重な輸入制限を逃れるための知能犯  
 後半になると、中級時計が姿を消し次第に高級品に移行
- 昭和40年代 内外価格差の大きかった金塊が密輸の王座 覚醒剤 拳銃も増加  
 海外旅行者の増加に伴い携帯品密輸摘発増加
- 昭和50年代 一般商業貨物、コンテナ等に隠した大口の覚醒剤等手口が巧妙化・組織化
- 昭和60年頃から現在 郵便物、ビジネス航空貨物などによる小口の密輸の件数急増  
 他方、洋上積み替えによる大口も  
 不正薬物の種類が多様化 コカイン、向精神薬 大麻などが覚醒剤、ヘロインに加わる  
 グローバル化に伴い仕出国も多様化  
 知的財産権侵害物品、希少生物等の新しい重点業務も  
 テロ危険物品、地球環境有害物品、盗難中古自動車、覚醒剤原料等の輸出摘発も  
**消費税8%後、金地金の密輸と不正な輸出還付が社会問題化**

無断転載禁止 14

戦後の混乱期は何と言っても物資不足なので、砂糖、薬品（ペニシリン）、食料などの生活必需品が中心でした。この頃は密輸の形態も大型、集团的、暴力的で、税関職員がピストルを携行していた時代もあったと聞いています。

昭和30年代になると、厳重な輸入制限を逃れるための知能犯、経済犯になってきて、時計（南京虫）、貴金属が主役になります。昭和30年代も後半になると、中級のものが姿を消して、高級品に移行していきます。

昭和40年代になると、当時規制によって内外価格差がいちばん大きかったのは金なので、金塊が密輸の王座になりました（股間に金をつって密輸しようとして、歩き方が不自然でばれたという話もあります）。また、覚醒剤、拳銃も増加してきて、それから海外旅行が自由化されたことで、携帯品の密輸が増加しました。

昭和50年代になると、今度は一般の商業貨物、コンテナに隠した大口の覚醒剤、銃砲など、手口が巧妙化、組織化してきます。

昭和60年頃からは多様化してきました。グローバル化が進むからですが、郵便物、ビジネス航空貨物といった小口の密輸がどんどん増えてきました。ピストル20丁を分解して、ナイフとフォーク、スプーンの中にまぜて、郵便で送ってきたという事例が横浜でありました。

一方で、洋上積み替えによる超大口も後を絶たず、これはなかなか捕まりません。また、不正薬物の種類も、コカインとか向精神薬、大麻などが伝統的なものに加わってきます。

グローバル化に伴い、仕出地も多様化してきます。平成初期の最大の問題として、旧ソ連崩壊に伴ってトカレフ、マカレフという銃砲が増えてきました。一方で、伝統的な不正薬物や銃砲ではなくて、知的財産権侵害物品（偽ブランド商品）、ワシントン条約違反といったものも出てきました。

さらには、密輸というのは、主として入りを押さえていけばよかったものの、最近はおも大変です。テロ危険物品、地球環境有害物品、盗難中古自動車など、これらはもっぱら輸出です。覚醒剤の原料も輸出です。輸出も輸入もやらなくてはならないということで、税関もおも大変です。

昔の話では毒蛇のコプラの入った箱の下に隠したとか、南太平洋で収集した遺骨の箱に隠したとか、ピストル20丁を分解してナイフやフォークと一緒に箱に詰めて郵便で送ってきたなどの事例がありました。

次の表に最近の大口や特異な事例を密輸のルート別にまとめてみました。密輸のルートとして、何といっても大口なのは、いわば玄関口から正面突破を図る海上貨物です。ここにあるように色々偽装してきますのでこちらもおも知恵がいますが、27年横浜のテキーラの瓶に液体に溶かして隠して来たなどというのは

見つけるのが至難の事例でしょうね。

## 不正薬物密輸、大型化・手口の多様化・巧妙化

- (海上貨物)
  - ・メキシコからテキーラ瓶内に液体に溶かして隠匿した覚醒剤 約171kg(27年10月横浜税関)
  - ・メキシコからの海上コンテナで石材内に隠匿した覚醒剤 約145kg(26年1月門司税関)
  - ・中国から猫砂の袋内に隠匿した覚醒剤約351kg(29年5月横浜税関)
  - ・南アフリカから木製ドア内に隠匿した大麻約100kg(29年12月東京税関)
- (洋上取引・船舶乗組員)
  - ・ロシア从小樽港入港の外国貿易船乗組員が覚醒剤 約27kgを陸揚げ(26年12月函館税関)
  - ・水島港に入港した外国貿易船乗組員がリュックサック内に覚醒剤 約6kgを隠匿して下船(27年12月神戸税関)
  - ・洋上で船籍不明の船舶から受取り、茨城県内の漁港に陸揚げされた覚醒剤約475kgを摘発(29年8月、東京税関・横浜税関が関係機関と共同で)
- (航空貨物)
  - ・メキシコからのバイナッブル缶詰内に隠匿した覚醒剤約30kg(26年3月東京税関)
  - ・メキシコからの金属製タンク5本内に覚醒剤約44kgを隠匿(27年3月東京税関)
  - ・香港からの金属製伸縮棒内に隠匿した覚醒剤約5kg(29年5月大阪税関)
- (航空旅客)
  - ・米国から成田へ到着した日本人男性、携帯品の玩具箱内に大麻草 約15kgを隠匿(26年2月東京税関)
  - ・ウガンダから羽田へ到着したウガンダ人男性、スーツケース内に収納のコーヒー袋25袋内に覚醒剤 約20kgを隠匿(27年11月東京税関)
  - ・タイから到着したタイ人女性、携帯品ネックピロー内に覚醒剤約5kgを隠匿(29年4月東京税関)

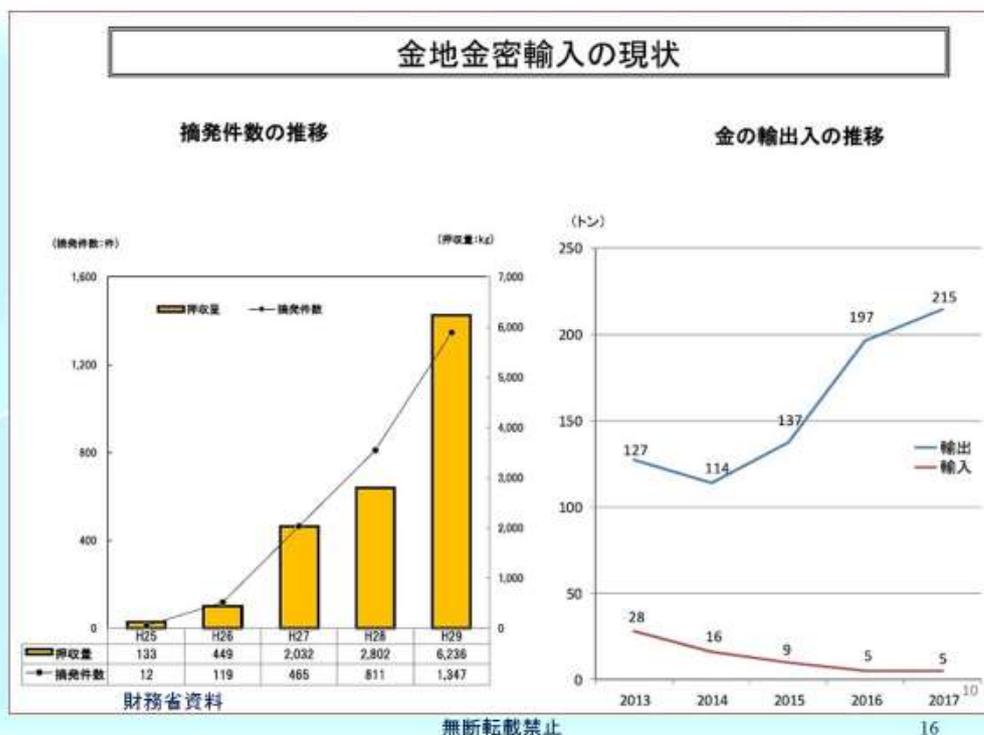
無断転載禁止

15

次の洋上積み替えはいわば垣根を越えて庭から入ってくるようなものでこれも大口です。海に囲まれた日本ですから内航船用の地方港や漁港は津々浦々にあります。ここには税関はありませんから捕まえるのは大変です。

件数が多いのは航空貨物と旅客の携帯品です。比較的小口なものが多いですが、件数は多く、偽装も巧妙になっているので目が離せません。

最近頭が痛いのが金の密輸です。金は麻薬・銃砲などと違ってそれ自体が有害物品ではありません。これは密輸入した金を今度は堂々と輸出して8%の消費税還付金を詐取するという財政犯です。5トン、6トン、200トンと覚えて下さい。スライドの右にあるように正規の輸入量は年間5トン程度なのに摘発された密輸がそれを上回る6トン、さらに200トンも輸出出来るはずがないのです(国内生産は都市鉱山で90トン程度)。マクロ的におかしいことが明々白々なのに還付を続けているのがおかしい。当局は摘発強化を威張っているが焼け石に水、私は制度的対応が必要だと主張しています。



## 税関も世につれ

こういう世の移り変わりにつれて、税関の役割も変化しています。

**税関も世につれ**

**原点は国境での関税の徴収・・・CUSTOMSの語源**  
財政収入確保→国内産業保護→貿易摩擦の武器  
(副産物:貿易統計、商品分類)  
現在税収の約1割を徴収、うち関税は2%に止まる

**密輸取締**(安全・安心な社会の実現)  
武器、不正薬物等の水際防御  
(新しい役割)

**国際協調の下で地球規模での要請に対応**  
地球環境保護、偽ブランド、ワシントン条約、テロ対策等  
(輸入のみならず輸出も警戒対象)、一方貿易の円滑化も重要課題に

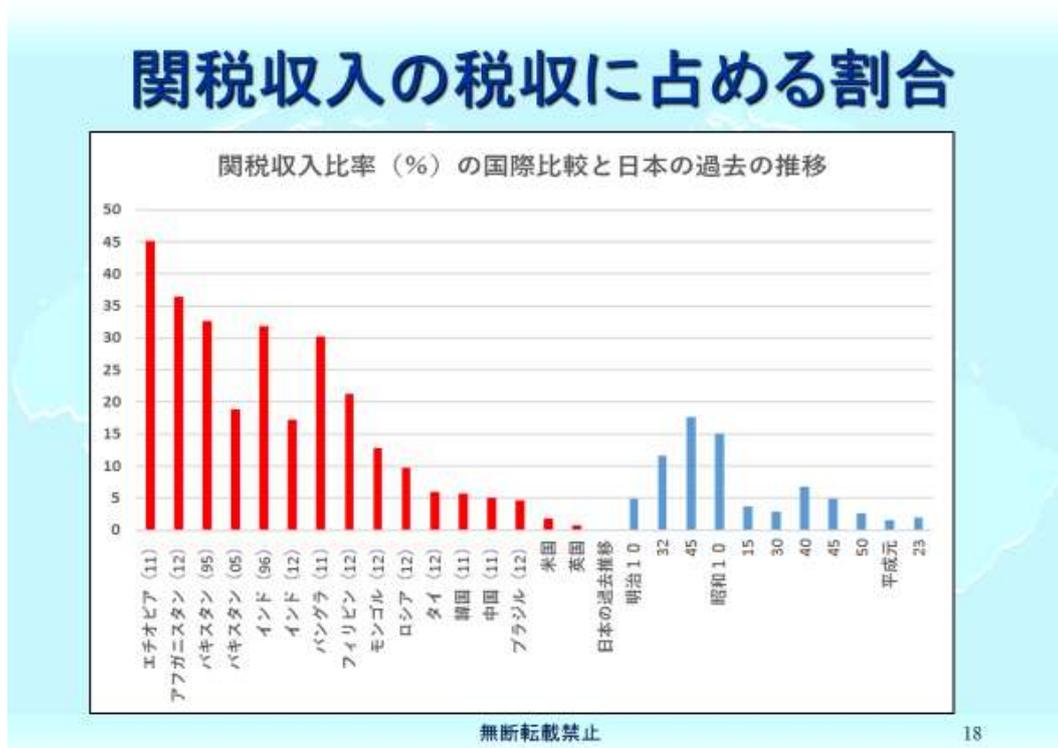
**地域の振興**  
開港、国際空港、インランド・デポ立地促進等、地域との連携・協力

無断転載禁止 17

まず税関の伝統的役割は何と言っても関税(昔は運上といいました)の徴収で、これこそ運上所以来の税関の原点です。西洋では、国境でお金を取るという慣わしは、人類の歴史上どのぐらい遡るか分からないほど大昔から続いている慣習(カスタム)なので、税関のことをカスタムズと呼ぶということが、アダム・スミスの本に書かれています。アダム・スミスの父親は

やはり同名のアダム・スミスというのですが、スコットランドの関税庁長官でした。

関税の徴収の意義も、時代とともに変化してきました。最初はともかく収入で、今でも途上国では、関税収入が財政収入の3割を超えている国もあります。90年代半ばのインド、パキスタンなどもそうでした(次のグラフ)。



ひとつ大切なことを申し上げておきますと、我が日本は開国当初の新興国時代から、関税収入の依存度が低く、関税に依存しない財政でした。これは安政の不

平等条約で、関税率を自分では決められない、関税自主権が無いこととされてしまったからです。「災い転じて福となす」、これが却って関税に依存しない財政(地租)、産業の競争力強化に繋がり、成長に寄与しました。日清・日露戦争後、2次にわたる条約改正で関税自主権を回復した後もせいぜい15%止まりと、先進国並の低い水準でした(グラフの右側)。

先進国化してくると、収入を上げるのは二の次になり、国内産業の保護にウエイトが移り、それも次第に薄れると、今度は今トランプ大統領がやっているように貿易摩擦の武器になってきます。

関税の徴収の副産物として、貿易統計と商品分類というのがあります。貿易統計は、前月分が翌月の25日に公表されるという経済統計の中でもっとも速報性のある統計で、だから宮澤元総理も「門口にいるとよく分かる」とおっしゃった。その門口が統計になった貿易統計は、経済統計の中でいちばん早く、品目別、国別に分かりますから、世界が見えるいい統計です。

これら税関の伝統的な役割と、もちろん武器や不正薬物の輸入防止といった安全確保もそうですが、これに加えて新しい役割が出てきました。意外に知られていないのが地域の振興です。横浜という街は、まさに港、運上所が設けられたことによって生まれ、発展したのです。それと同じように、開港、国際空港ができることによってその地域が発展するということは、平成の御世にもたくさんあります。

また、インランド・デポというのがあります。つくばや宇都宮に税関があるといったら驚かれるかもしれませんが、要するに成田から保税運送をして、つくばや宇都宮で初めて貨物を開けるのです。そうすると、あたかもつくばや宇都宮に空港があるかのような、あるいは海岸線がそこに入り組んでいるような、そういう経済効果を地域にもたらすのです。

YAT（横浜航空貨物ターミナル）も、空港のない横浜に成田から航空貨物を保税運送で運んできて横浜で開けるといいうものです。つまり横浜が海の港だけではなくて、空港もあるような経済機能を持つということで、YATも画期的な総合物流基地としての横浜港の機能の更新に貢献したと思います。

それから本質的なことではありませんが、各種イベントにご協力するという役割もあります。三題話として、オリエント急行、QEⅡ、自由の女神と3つをご紹介します。これらはいずれも日本に輸入された英仏の文化遺産です。

オリエント急行は昭和63年、開局30周年記念事業として、某テレビ局が輸入して、JR線を営業走行しました。もちろんイベントが終われば戻すのですが、その間、日本で営業をしている以上は輸入にあたります。これは税金を払っていただいて輸入しました。

自由の女神についてですが、これはフランスのセーヌ川の自由の女神であり、ニューヨークではありませ

ん。平成10年日本におけるフランス年に、フランスからお台場に輸入しました。展示場で展示するものは、再輸出するのであれば免税できるという規定が関税法にあって、これは免税で入ってきました。

(重要な地域イベントへの協力例 三題話)  
**オリエント急行・QEII・自由の女神**

		
WIKIPEDIAより	横浜税関提供	筆者撮影
<b>オリエント急行</b>	<b>クイーン・エリザベス2世号</b>	<b>自由の女神</b>
昭和63年、某テレビ開局30周年記念事業:JR線を走行営業	平成元年横浜開港130周年記念事業:大棧橋でホテル営業	平成10年「日本におけるフランス年」でお台場に展示
課税通関	外国貿易船と位置付	再輸出免税

無断転載禁止 19

クイーン・エリザベス号の場合は少し複雑です。これは27年前、横浜開港130周年記念事業（ちょうど私が横浜税関長の時）で、大棧橋でホテルを営業しました。おそらく最初これを企画された方は、外国客船だから、この中でお酒も肉も無税で提供できるのではないかと思ったのではないかと思うのですが、世の中そんなに甘くはありません。

公海上を航海しているから免税なのであって、日本で横付けしてホテルの営業をすれば、実は本当に厳密に関税法を適用したら、この船ごと輸入なのです。この船の値段がいくらするか分かりませんが、船ごと輸入すれば膨大な金額だったと思います。それではこの事業が成り立たなかったのも、何とかこの事業が成り立つようにならないかとみんなで知恵を絞り、苦心した結果、非常にフィクションめいていますが、豪華客船クイーン・エリザベス号を外国貿易船と位置付けたのです。

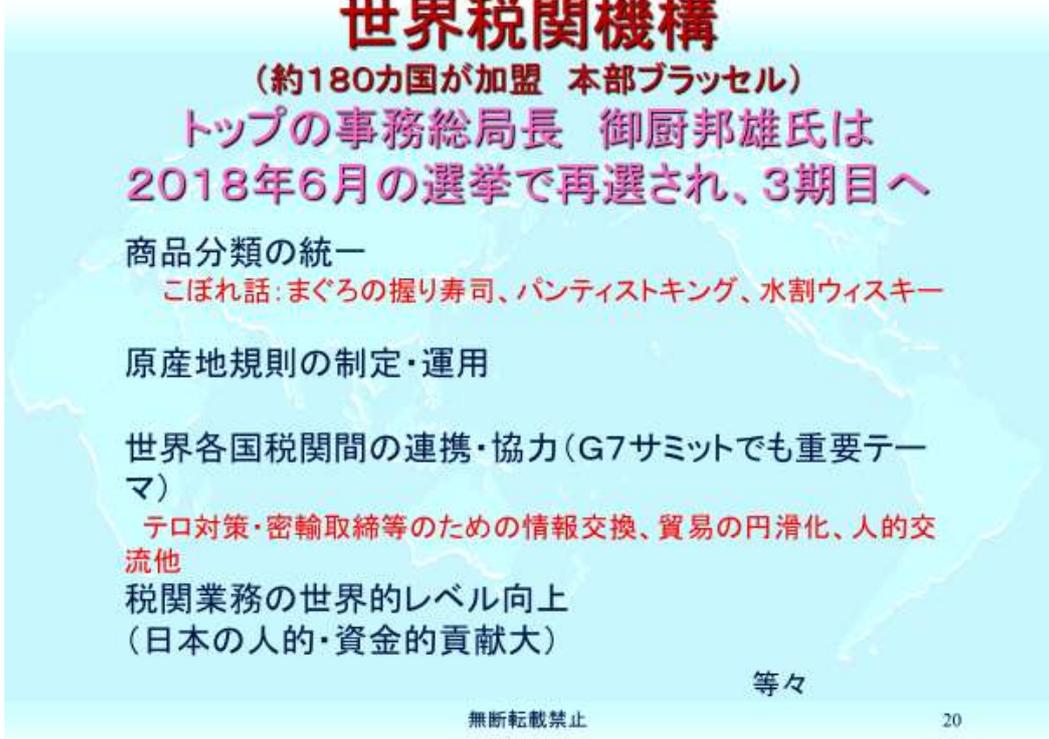
なぜ客船が貿易船なのかというと、飲ませるお酒や食べさせる肉をたくさん積んできますが、積んできたものは税金を払って通関していただきます。そうすると、それは貿易のための輸送です。貿易のための輸送をするから、外国貿易船だということです。

貿易船になることのメリットは、まずここで焚く油には税金がかかりません。無税で油が焚けます。このホテルを営業するのに油を焚くので、この油を輸入していたのでは営業は成り立ちません。船員が飲食するものも無税で輸入ができます。客船事業というのは労働集約的な事業で、お客の定員が1800人でしたが、従業員が1000人いるのです。全部が全部外国人ではないのですが、その1000人が飲み食いするものや何かが無税扱いになれば、事業として成り立ちます。これはポート130という第3セクターがおやりになったのですが、そういうことで成り立つように

外国貿易船という知恵を出しました。このように地域振興に協力もしています。

## 世界税関機構

世界各国の税関の連携・協力のための国際機関として、世界税関機構（WCO）というのがブラッセルにあります。



**世界税関機構**  
(約180カ国が加盟 本部ブラッセル)  
トップの事務総局長 御厨邦雄氏は  
2018年6月の選挙で再選され、3期目へ

商品分類の統一  
こぼれ話: まぐろの握り寿司、パンティストキング、水割ウイスキー

原産地規則の制定・運用

世界各国税関間の連携・協力(G7サミットでも重要テーマ)  
テロ対策・密輸取締等のための情報交換、貿易の円滑化、人的交流他

税関業務の世界的レベル向上  
(日本の人的・資金的貢献大)

等々

無断転載禁止 20

1952年に欧州17か国で設立、現在は180の国・地域が加盟しています。日本は遅れて東京オリンピックの1964年に加盟しましたが、目覚ましい貢

献をしています。今のトップ事務総局長は神奈川県人の御厨邦雄氏で、さる6月に3期目に再選されました。数少ない日本人国際機関トップとして精力的にご活躍です。一昨年帰国中の同氏から、世界がIT化、グローバル化する中で税関の役割が益々多様化し、重要性を増している具体例の数々を聞きました。

現実の商品は何百万、何千万とあるわけですが、統計のためにも、税金を取るためには、これを何種類かに括らなければなりません。しかし、これを各国が勝手に行うと国同士で整合性が取れなくなるので、この世界税関機構が中心になって商品の名称及び分類についての統一システムに関する国際条約（通称HS条約）という条約で、8000くらいの品目に括っています。

この分類というのがなかなか曲者で、しばしば貿易摩擦のタネになったり、対抗手段として使われたりしています。特にひどいのが米国で、トランプ大統領登場以前からも時々ルール違反の無理押しを平気でやっています。日米間ではミニバンが乗用車か貨物自動車かで争われた日米ミニバン戦争というのがありまして、ジェームズ・ボバードという人の『アメリカ貿易は公正か』という本には、韓国からのテニス・シューズに靴ひものスペアがついているので繊維製品と認定したとか、インドネシアからのカップ・ラーメンに僅かの砂糖が含まれているので、全体を砂糖製品

と認定したとかいう例が載っています。

日本で新聞紙上を賑わせた話に、平成4年秋の‘すしボーイ’騒動があります。私が大蔵省関税局長の時でした。大阪の握りずしチェーンがマグロの握りずしを輸入しようとしたのを、食糧庁がコメだから輸入まかりならんと止めようとししました。ちょうどウルグアイ・ラウンドの最終局面で、コメの問題が猛烈にセンシティブだった時期でした。ところがこの問題は、ネタの重量が全体の20%を超えるかどうかで、魚介類の加工品か、穀物の加工品かがきまるといふ、法律上も条約上も疑問の余地の無い話で、淡々と処理しました。

こうした意図的なものをのぞけば、やはり文化の違いかな、というお話をします。その昔パンチィ・ストッキングは下着かストッキングかが争いになりました。昭和48年11月 今でいうWCOの委員会でもストッキングだとする日本と下着だとする欧米多数国とが対立、当時在ベルギー一等書記官だった、若き日の柿澤弘治 元外務大臣の奮戦空しく、23:5で日本の負けとなりました。木綿の下着とパンストのどちらを下に穿くかという文化の違いだといふ落ちになっています。

平成初年頃瓶詰の水割りウイスキーが売り出され、平成5年の税制改正で、内国税である酒税については度数に応じた特別の軽減税率が導入されましたが、関税上の分類をどうするかで議論しました。関税局内の

国内派は水で割ろうがどうしようがウイスキーはウイスキーだとウイスキー説、国際派ははじめから水で割ったのなんかウイスキーじゃないと圧倒的にその他のスピリッツ説と意見が分かれ、やはり文化の差だと確認出来て面白かったです。

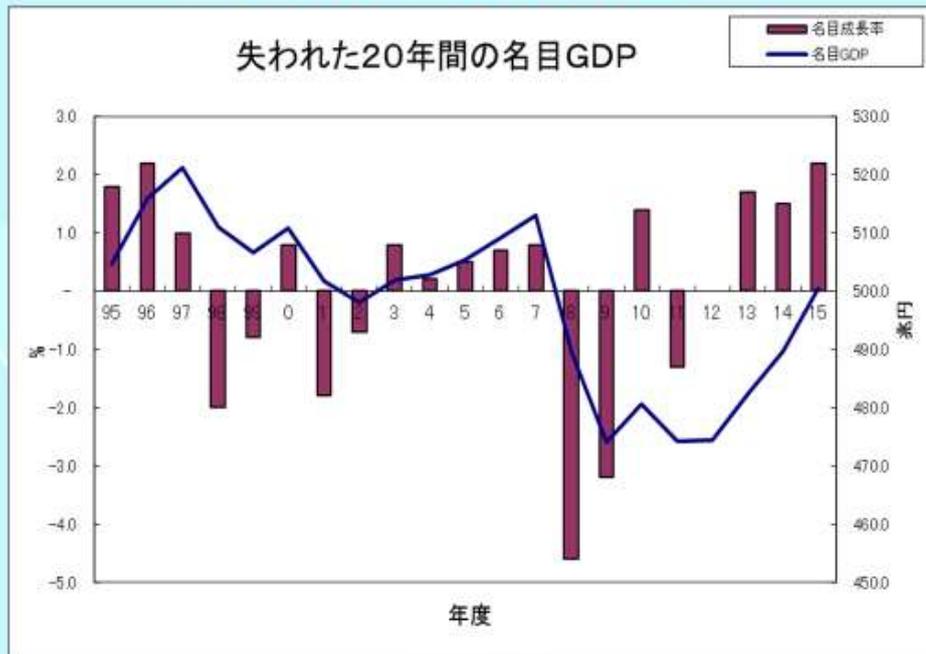
## 失われた20年

再び経済に話を戻します。先にお話しした戦後日本経済の第2フェーズ、安定成長期は大体プラザ合意の翌年1986（昭和61）年頃まで続き、このころからいわゆるバブルが始まり、加速していきます。しかし人類の歴史上、弾けなかったバブルはありません。日本のこのバブルは平成2、3年をピークとして弾け、不良債権の山と深刻な景気後退が待っていました。バブルがなぜ起こったのか、バブルと弾けた後の政策対応はどこが間違っていたのか、などは極めて重要、かつ、興味深いテーマであり、山のように本が出ています。私自身も色々書いたり講義したりしていますが、本日はこのテーマに入る時間がありません。ただ結果としての事実だけを復習します。

次の「失われた20年」のグラフが示すように、1995（平成7）年（阪神淡路大震災やサリン事件の年）から今日まで浮き沈みはありましたが、結局元のレベルに戻っただけで、この20年間を通じてみると成長は無かった、失われた20年（バブルそのものも

あだ花だったと思えば、そろそろ失われた30年) だったということです (この後最近の2, 3年少し挽回していますが)。

## バブル崩壊後失われた20年



無断転載禁止

21

次のグラフに21世紀に入ってからの世界各国の一人当たり実質GDPの成長を示していますが、日本はビリに近い低成長で、その結果直近の絶対水準では英国に抜かれ、韓国に迫られています。さらにその次の表でG7諸国の一人当たり名目GDPの推移を並べていますが、一時はイタリア以下のビリに転落しました。その後欧州通貨危機で少し変わりましたが、それでも辛うじてイタリアを上回るビリから2番、トップ米国の3分の2と、数字だけ見ると昭和50年代前半並みに転落 (実力とは実感できませんが)。

## 21世紀入り後の成長各国比較



実質一人あたりGDP  
ランキング

国	2014(米)
米国	54369
オーストラリア	46000
ドイツ	45219
台湾	46038
カナダ	44967
フィンランド	40660
フランス	40537
英国	39826
日本	37938
韓国	35376
ニュージーランド	35309
イタリア	35131
チェコ	30046
ハンガリー	29019
ロシア	24448
チリ	23096
アルゼンチン	22301
メキシコ	17956
ブラジル	16155
タイ	15678
中国	13224
ペルー	11889
インドネシア	10651
フィリピン	6973
インドネシア	5808
ミャンマー	4752
世界平均	14937

無断転載禁止

22

## G7諸国の一人当たり名目GDP

(米ドル)

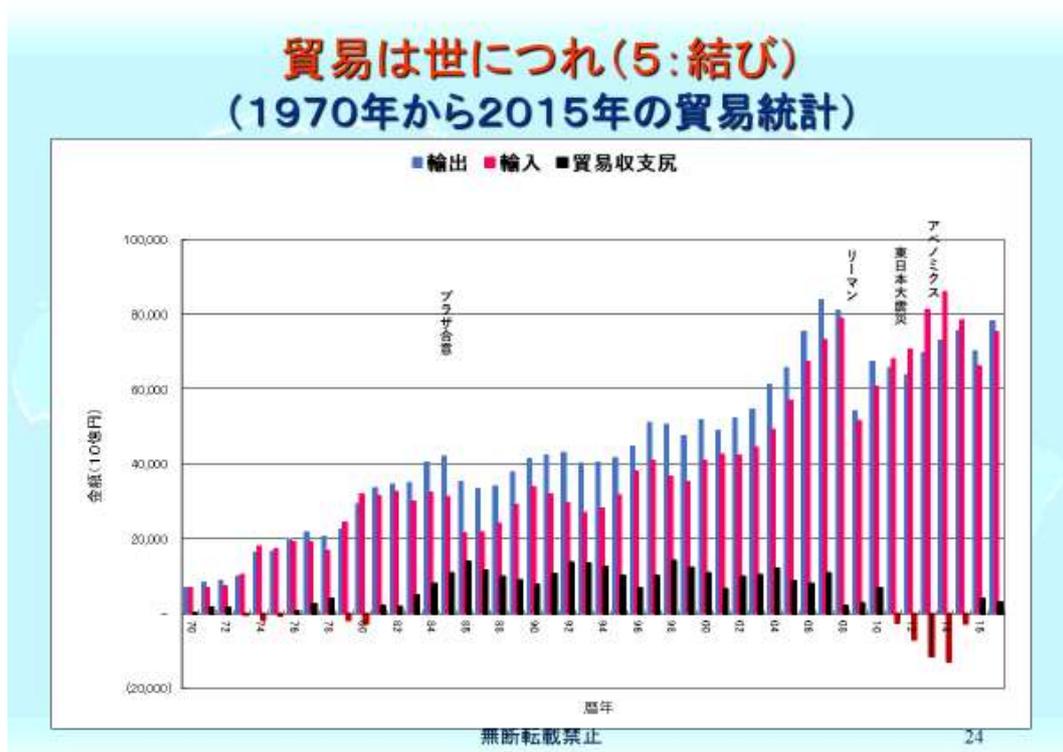
1991	2002	2004	2007	2014
日本 28134	米国 36116	米国 39548	英国 45962	米国 54369
米国 23456	日本 30837	英国 36239	米国 45607	加 50304
独 22612	英国 26674	日本 36084	加 43278	独 47773
加 21340	独 24454	独 33279	仏 42019	英国 45729
仏 21280	仏 23653	仏 33012	独 40360	仏 44331
伊 21052	加 23417	加 31014	伊 35654	日本 36221
英国 18107	伊 21327	伊 29679	日本 34384	伊 35334

無断転載禁止

23

## 1970年以降の貿易動向

最後に、これらの背景を頭に入れながら、もう一度貿易面から眺めましょう。



期間をやや長くにとって、1970年以降の輸出入をみます。1973年の第1次オイルショックで、73年、74年、75年と、貿易収支は赤字になりますが、日本は先進国中でもっとも早くオイルショックを克服して、76年頃から貿易で1人勝ち状況になりました。

そういうことで外圧が強まるわけですが、日本経済

機関車論というのがあって、ボンサミットなどで、1977年、78年（昭和52，3年）と、巨額の財政出動を求められました。まさに、これが今日の国債残高累積の始まりです。

1979年の第2次オイルショックで再び貿易赤字となりますが、これもいち早く克服して、集中豪雨的と非難されたように輸出が急増しました。これで欧米諸国が悲鳴を上げて、日米円ドル委員会、プラザ合意、日米構造協議といった外圧が続くこととなり、1987年にバブルになって、輸出も貿易黒字も少し減ります。

ところがバブルが弾けた1991（平成3）年からは、再び輸出が増加に転じますが、93年から95年の春にかけての急激な円高で減少し、97年の大型金融破綻による大不況で、また輸出が増えました。

輸出のレベルをみてもみると、98（平成10）年から2003（平成15）年あたりまで概ね年間で約50兆円だったのが（もちろん中身がいろいろ変わってきていますが）、2004年頃から急激に増加し、2007（平成19）年には80兆円を超すまでになりました。5年間で6割も増えたこととなります。この間、いざなぎ景気を上回る戦後最長の息の長い回復といわれましたが、結局この輸出バブルに支えられていたということがわかります。

そこへ2008（平成20）年秋のリーマンショックが襲いかかります。リーマンショックの本質である

サブプライムローンとその証券化商品の焦げ付きによる直接的被害という点では、本邦金融機関の被害は欧米の銀行に比べて微々たるものでした(日本のバブルの手痛い教訓で賢くなっていたからです)。にもかかわらず実体経済の面では、日本が先進国中最も深刻な打撃を受けました。それは、世界経済の低迷による影響でこの輸出バブルが弾けたからです。翌2009年には、輸出は54兆円と6年前の2003年水準にまで急落、貿易黒字も2008年、9年と2兆円そこそこにまで急減しました。2009年それでも辛うじて黒字に踏み止まったのは、原油価格が前年のバーレル100ドル近い水準から60ドルそこそこまで低下してくれたからです。

2010年になって世界経済の回復から輸出が67兆円と少し持ち直したため、貿易黒字は6.6兆円とピーク時の半分程度にまで回復したところへ、2011(平成23)年の東日本大震災が襲いかかります。全国原発が次々と運転を停止、火力発電に切り替わっていったため原油の輸入が急増した上に、原油価格の90ドルへの再上昇が追い打ちをかけて輸入が急増、遂に貿易黒字が消え、2.6兆円の赤字に転落しました。オイルショック以来31年振りの赤字転落です。オイルショックというような異常時を除き、日本が貿易で赤字になるなんて、考えられないことでした。翌2012年は原発停止が全原発に及んで、いわば平年度化し、貿易赤字は6.9兆円と記録更新しま

す。

そして同年12月の安倍政権誕生でアベノミクスが宣言され、翌年から量的質的金融緩和が導入されて、急速な円安が進みます。しかし円安にもかかわらず輸出の数量が伸びず、輸出は概ね横ばいのところで輸入だけが80兆円を超えるまでに急増、貿易赤字は2年連続で約12兆円を続けました。2015年になって原油価格が40ドル程度まで下落して円安を相殺してくれたお陰で、貿易赤字は2.8兆円まで減少しました。2016年になってから今度は円高が進み、輸出は減少したものの、原油価格も若干戻りながらも低位を続けた結果、貿易収支戻は4兆円の黒字と6年振りの黒字に戻り、2017年は世界経済の好調を映じて輸出が2008年以来の水準にまで戻ってこれが国内景気を牽引したものの原油価格の高騰で輸入が14%も伸びたため、黒字幅は2.9兆円と縮小したが、なお2年連続の黒字です、この基調は2018年入り後も概ね続いているようです。

今後どうなるかは何より世界経済の動向と原油価格、地政学的不確定要因などによるので、なんとも予想が難しいが、大きなトレンドとしては第1次所得収支は黒字が増える反面貿易収支は減少する成熟した債権国への道を辿ることでしょう。

これで今日の話は大体終わりです。最後にもしお疲れでなければ、2点だけ問題提起します。

第1はちょっと専門的ですが、日本経済全体を家計に譬えて簡単に言うと、旦那が汗水たらして稼いで、お金を貯めた積りでいたら、それを管理している奥さんが証券セールスの口車に乗せられてすってしまったという構図です。

先ほど見たように日本経済は長いこと貿易収支、そして経常収支の黒字を続けた結果世界の純債権国になっていました。ところが私が2000年以来研究分析してきたところによると日本の対外純資産は、次のグラフで見る様に、経常黒字の累積程には増加せず、目減りを重ねていました。

幕末金流出の再来？

## 黒字国日本、対外純資産の目減り



(参照) 拙稿「黒字国日本、対外純資産の目減り 鍵を握る本邦金融機関の競争力」

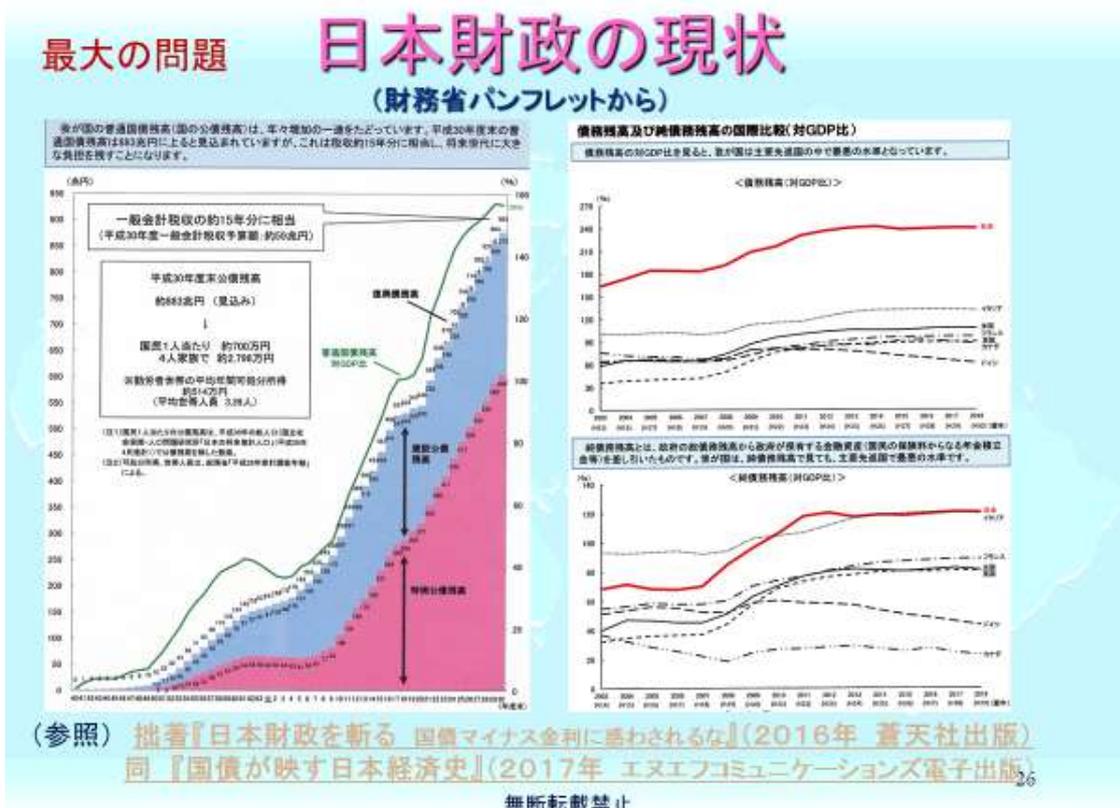
日本関税協会刊『貿易と関税』2018年6月号

無断転載禁止

25

世界一の対外債務国であるアメリカが、経常赤字を垂れ流しながら、それほどには対外純債務が増えていないのと全く対照的な話で、一口で言えば、日本国民の富を運用している本邦金融機関の運用力が外国投資家に劣っていたため、品悪くいえば、かもられてきたということです。

第2は言い尽くされていることながら日本財政の持続不能な現状についてです。今日はお話しませんでした。財務省資料を転載だけしておきます。



バブル崩壊後の不況に対し、政府はこの四半世紀にわたり、財政金融両面から空前のマグニチュードの対策を打ち続けてきました。金利がマイナスになるなんていう金融政策の話は残念ながらここでは触れませんが、財政面でも凡そ考えられない規模の挺入れをしてきた結果、日本政府の債務残高は幾何級数的に増大し、先進国中で飛び抜けて最悪、あのギリシャよりも数字の上では悪い、到底持続不能な水準に至っています。にも拘わらず、経済情勢は一向に好転せず、徒に子孫へのツケだけが雪だるま的に累積していったというのが、失われた20年乃至四半世紀の財政面からの総括です。

日本の財政がこんなになるまで悪化したのは、いつの時代のどのような政策運営が原因だったのか、現状は本当に深刻なのか、この素朴ながら大切な問いに対する答えを自身の長年にわたる現場での体験から得た歴史の教訓に求め、さらに独自の分析も付け加えて、遅ればせながらもこれから脱却するにはどうすればよいのかを提案するのが私の最新作『日本財政を斬る』です。

内容は読んでのお楽しみなのですが、サワリ中のサワリだけを種明かししておきますと、先ず現状の日本財政は破たん状態にあり、持続不能だということを実証しています。その上で、財政の破綻とはとりもなおさず国民生活の破綻、つまり財政とは国民のもの、自分のことであるということを通り易く訴えるよう工

夫しました。

いつの時代のどのような政策運営が原因だったのかという点については、私の実際の体験に基づき、大きく3つの要因を、知られざる数々のエピソードも豊富に織り込みつつ示しています。

さらに、日本国債は日本人が持っているのだから心配ないとか、いずれインフレで帳消しだなどという無責任な楽観論に対しても、実証的に反論しています。お読み頂ければきっと「目から鱗」になるでしょう。もし電子書籍をお読みになるなら、本書を増補改訂した『国債が映す日本経済史』がさらにお勧めです。

ご清聴有難うございました

(完)